

平成 22 年度「スラブ・ユーラシア地域（旧ソ連・東欧）を中心とした総合的研究」（共同利用型）  
成果報告

「アムダリヤ水利権問題をめぐる帝政末期ロシア＝ヒヴァ・ハン国間関係の研究」

塩谷哲史（筑波大学大学院人文社会科学研究科準研究員）

本研究は、1913 年から 1914 年にかけて、ヒヴァ・ハン国の君主イスファンディヤール・ハン（在位 1910-1918 年）と、同国の保護国化（1873 年）以降ロシアとの関係を監督してきたアムダリヤ管区長官 N. S. ルィコシン（在任 1912-1914 年）との間に起きた、ヒヴァ・ハン国領内でのアムダリヤの水を利用した企業主導の大規模灌漑事業の是非をめぐる議論の展開とその背景を明らかにするものである。

のべ 5 日間という短期の滞在ではあったが、当初予定していた当時の定期刊行物（『トルキスタン通報 *Turkestankie vedomosti*』など）の閲覧のみならず、土地整理農業総局長官であった A. V. クリヴォシェインの回想録や帝政末期ロシアのトルキスタンの財政に関する先行研究を検討することができた。さらに日本学術振興会外国人特別研究員としてセンターに滞在中で、帝政期からソ連初期にかけてのトルキスタンにおける水、土地、森林、財政など幅広い分野の研究を手がけるペアトリーチェ・ペナティ氏と意見交換ができたことは貴重であった。

現在、本研究の内容を、英文にまとめて投稿し、査読結果を待っている。またアムダリヤ水利権問題の歴史的前提をなす、ロシアの進出（1873 年）以前のヒヴァ・ハン国における政治権力と灌漑との関わりについては、専論を査読誌に掲載した（SHIOYA Akifumi, “The Irrigation Policy of the Khanate of Khiva regarding the Lawzan Canal (1), 1830-1873” 『筑波大学地域研究』 32, 2011 年、115-136 頁）。なお、この続稿では、1873 年ロシアの進出以降、1913 年のアムダリヤ水利権問題が起きる前後までのハン国領内の灌漑事業の展開を、ロシア＝ヒヴァ・ハン国間関係に位置づけて論じる予定である。

末筆ながらセンターおよび図書室のスタッフの方々に御礼を申し上げたい。